



刻歩極頂

長井市立西根小学校
学校だより第13号
令和5年11月10日

「刻歩極頂」(こくほきょくちょう) 一歩一歩の歩みを大切に 頂上にたどり着く
長井市初代名誉市民 孫田 秀春 博士 揮毫

全校生一人一人が輝いた学習発表会

10月28日(土)、学習発表会が行われました。全校生一人一人が輝く学習発表会になりました。

4年生の「ひびけ!縄文太鼓」では、今までで最高の出来栄え、渾身の演奏を披露しました。6月から練習を続けてきた成果が表れ、全体のバランスもよく、誰しもが満足のいく演奏だったと思います。子供たちの意欲が光り、西根地区の大切な文化を見事に引き継ぐことができました。

1年生の発表「やくそく」は、国語と音楽で学習したことにアレンジを加え、それぞれの役を元気いっぱいに行うことができました。入学してから始めた鍵盤ハーモニカもなかなか上手でした。

3年生の発表「三年とうげ」は、国語の教科書にも載っている朝鮮のお話「三年とうげ」を劇にしたものです。意欲まんまんの取り組みが光り、お囃子は3年生のオリジナル。素晴らしいですね。

2年生の発表「スイミー!!」は、国語で学習した「スイミー」を劇にしたものです。明るく元気な2年生です。劇と歌「手のひらを太陽に」から、見ている人がみんな元気をもらえたように思いました。

5年生の発表「Music Start -おどって 歌って 楽しんで-」は、5年生がみんなで考えて創り上げてきたとのこと。休み時間も惜しんで練習してきたこと、その成果がよく表れました。ダンスや演奏中で一人一人の個性がよく表れていたと思います。

6年生の発表「消えた少年」は、6年生全員がさすがの演技だったと思います。一人一人が役になり切り、役を通して「失敗を恐れず、挑戦する気持ちを大切にしたい」という主題に迫る迫真の演技ができていたと思います。

なお、学習発表会の様子は、西根地区文化祭が行われている西根地区コミセンやいくつかの福祉施設に配信してご覧いただきました。また、西根地区文化祭では、西根小PTA・西根地区コミセン主催の「おさがりプロジェクト」が開催され、皆様のご協力をいただきました。誠にありがとうございました。



4年生「ひびけ!縄文太鼓」



1年生「やくそく」



3年生「三年とうげ」



2年生「スイミー!!」



5年生「Music Start-おどって 歌って 楽しんで-」



6年生「消えた少年」

愛着形成に臨界期はあるか

私が今まで出会ったたくさんの子供たちの中に、多動傾向かな、と思えた子が何人かいます。保育園の年中児の運動会や発表会あたりから、ほかのお子さんとの違いを保育士さんや保護者が認識して、相談を希望することが多いようです。私もそのような相談を今までたくさんさせていただきました。

私は経験的にその子たちが次の4つのグループに分けられるように思います。

- ① 低学年くらいまでちょろちょろしていて、しだいに落ち着く子
- ② 受診するとADHDの診断を受ける子、あるいは「コンサータ」などの薬を処方される子
- ③ 今まで見逃されてきた軽度～中度の聴覚障がいのある子
- ④ 担任や保護者との相談や連携を行い、成果が上がってくると、多動傾向が消えていく子

いわゆる「愛着障害」かもしれないのは、④です。米澤好史氏は次のようにいいます。

「愛着とは、「特定の人に対する情緒的絆」のことで、こどもにとって、恐怖や不安から守られる[安全基地機能]、そこに行くときと落ち着く、ほっとする[安心基地機能]、そこから離れても大丈夫で、離れて行ったことを報告して認めてもらう[探索基地機能]の三つの機能があります。この絆が育っていない問題が、愛着の問題です。」

さて、愛着には「臨界期」はあるのでしょうか。岡田尊司氏は次のようにいいます。

「愛着が生物学的現象であることと関連するが、愛着の形成は、いつでも起きるというわけにはいかない。刷り込み現象と同じように、愛着形成が可能な時期は、生後の一定期間に限られるのである。この期間は「臨界期」と呼ばれ、生後1歳半までが、その時期に当たる。その時期を過ぎてしまうと、愛着形成はスムーズにいかなくなる。後から取り戻そうとしても難しいのはこのためである。」

これに対して、米澤好史氏は次のようにいいます。

「愛着形成に臨界期があり、生後1歳6か月までに形成されないとその後には形成はできないという考え方が以前ありましたが、それは間違いです。今でも、敏感期と言って、こどもが大きくなると鈍感になり、愛着形成・修復が難しいという考え方がありますが、筆者は、多くのこどもでの愛着修復に成功した事例から、それを明確に否定したいと思っています。誰かが適切なかかわりをしていないからそう見えるだけであって、愛着形成は生涯発達するものなのです。」

両者は相反することを述べているようですが、愛着の問題を抱える子どもを含め、私が今まで出会ってきた（相談してきた）子供たちを振り返ると、どちらの主張も実感として正しく感じます。

私は、①生後1歳半くらいまでの時期はきわめて大切である、②親や教師等が適切なかかわりをするれば愛着形成は生涯発達するものである、このように考え、教育や相談の仕事に携わっていきたいと考えています。

<文献> 『やさしくわかる！愛着障害』、米澤好史著、ほんの森出版
『発達障害と呼ばないで』、岡田尊司著、幻冬舎新書

【短 信】

- ◇ 10月31日（火）、昼休みにいなほ号が来校しました。多くの子が本を借りにきます。その様子をおらんだラジオのアナウンサーがインタビューに来てくださいました。その放送「おらんだ専科情報紹介 いなほ号！ in 西根小学校」の日時は、11日（土）13：00～、12日（日）13：30～、18：00～です。なお、西根小学校のHPにもその様子の写真を掲載しています。
- ◇ 学習発表会のご案内に記載しました配信URL及びQRコードで、11月20日（月）までご視聴いただくことができます。お見逃しの場合は、ぜひどうぞ。
- ◇ 10月2日（月）、グラウンドの真ん中にクマの糞を発見、翌日、学校付近の歩道にもクマの糞。市職員と猟友会の方々に花火で追い払っていただきました。その後、学校付近のクマ情報はありませんが、今週に入り、体育館の西側と北側、グラウンドに土を耕したような跡と蹄のような足跡。休日にイノシシが出没したのか、警戒が続く毎日です。皆様も十分にお気をつけください。